

特集にあたって

川中 豪

私が直接、日本以外の国の選挙

の風景をみる機会を得たのは、一九九八年に実施されたフィリピンの総選挙である。マニラから飛行機で一時間ほど離れた地方都市で地方政治の調査をしていたおり、六年に一度の正副大統領選挙、上下両院選挙、地方政府選挙の同時投票が行われた。私はある下院議員候補者の選挙運動に同行させてもらい、また、投票当日には投票所（小中学校）のなかをいくつかみせてもらった。そこでは、投票日にも多くの人々が街中にあふれかえっていた。投票終了と同時に開票が行われる投票所の教室では、多くの人々がひしめきあいながら見守るなか、担当者によって票が大声で読み上げられるたびに壁に貼られた紙に票数を記録する線がひとつひとつ書き込まれていた。その騒然とした雰囲気は日本でみ

る選挙の風景とはかなり異なる。

もちろん、日本でも選挙期間中は候補者や運動員が多数街頭に繰り出し、拡声器を通してウグイス嬢たちの声が響き渡るが、投票日には穏やかな空気のなか整然と投票が行われ、開票結果もテレビを通じて確認するのが基本だろう。

選挙は人々が政治をもっと身近に感じる瞬間である。政治が日常レベルに持ち込まれるがゆえに、それぞれの国柄をみることで、きる機会でもある。そこにはそれぞれの国の歴史の流れのなかで生み出されてきた独特の作法や社会のあり方を反映させた仕組みが存在している。本特集ではそうした作法や仕組みを取り上げ、各国の「選挙の風景」を描くことで、それぞれの国の人々が体験している身近な政治を紹介したい。

●選挙に対する信頼と「お作法」

政治学は選挙制度について多くの研究を積み上げてきた。小選挙区制や比例代表制の区別、その違いがもたらす効果などについてはかなりのことがわかってきている。

小選挙区制が二大政党システム、比例代表制が多党的なシステムを生む、という議論は良く知られたものである。また、各国がどのような制度を採用しているのかを分類し紹介しているものも多い。選挙区の定数の大小、票数を議席数に変換するやり方の違い、個人への投票が政党への投票かの違いなどが、各国の選挙制度の形態を分類する基準として使われている。

こうした制度が注目されるのは当然理由がある。それは、こうした制度が政治家の当選するための戦略に影響を与え、政党と政治

家個人の関係のあり方を決め、さらには政策の方向性までも決めていくからである。簡単にいえば、政治の動きがこうした制度によって決まるからである。一方、政治の動きに直接つながっていくとは考えられない制度や慣習にはあまり関心が払われてこなかった。政治家や政党の戦略とは関係のない事柄に詳しいことは、ただの「物知り」でしかないとみなされるからである。

にもかかわらず、選挙の現場での運営のされかた、すなわち選挙の「お作法」をみるのは意味があると考えられる。そこにはそれぞれの社会が政治をめぐるどのような信頼関係を作り上げることができているのか、あるいは、できていないのかがわかるからである。結局のところ、選挙を支えるのは信頼である。選挙の手続きに人々の信頼がおかれなければ、その結果に対する信頼は生まれない。選挙結果に信頼がなければ民主主義はなりたたない。選挙結果が公正に導き出されたものでなければ、その結果に不満を持つ人たちはそれを受け入れないだろう。暴力的な抗議行動や力による権力奪取の動きが生まれるかもしれない。各国

の選挙の「お作法」は、そうした選挙に対する信頼を確保するための様々な苦心の表れである。

●どのように投票するのか

投票所にどうすれば入れるのか、投票用紙はどのような形をしているのか、誰が票を数えるのか、日本人にとっては当たり前のことが、他の国においても同様に当たり前となっているわけではない。

投票所入場券が各家庭にハガキで送られてきて、たいした本人確認の手続きもなく投票できる、ということとは、他の国では普通のことではない。自分の名前が有権者名簿にあるかを必死に探し、身分証明書を提示して自分であることを証明するところから始まる国は多い。そもそも、それ以前に、投票するために事前に有権者として登録手続きをとって、投票する権利を確定させなければならぬ国も少なくない。投票所に現れた人に投票する権利があるかどうかは、本人の申告だけでは判明しないのである。

また、支持する候補者や政党の名前を投票用紙に書く日本のやり方も、識字率の低い国では採用されない。字を書き込むことを要求

することが実質的に投票する権利を多くの人たちから奪うことになるからだ。投票用紙に示された政党のシンボルマークを釘で刺して穴を開けたり、投票用紙に候補者の顔写真を入れて識別ができるようにしたり、あるいは電子投票マシンのボタンを押したり、それぞれの国の事情のなから生まれたさまざまな方法がある。できるだけ人々の意向を選挙に反映させ、選挙結果と国民の支持の乖離を小さくし、選挙結果への信頼を確保するための工夫である。

他にも、投票が終わってそのまゝ会場を後にする日本とは異なり、投票した印として手の指に消えない（といわれる）インクをつける国もある。インクをつけることでその人が再びどこか他の投票所で投票することができないようにするための方策である。これも選挙結果への信頼と大きく関わっている。

こうした選挙の信頼と密接に関わる選挙の「お作法」それぞれにその社会のあり方や歴史に根ざした信頼醸成のための工夫がある。逆にいえば、「お作法」を鏡として、その社会のあり方や歴史的な背景をみることができるだろう。

●選挙は標準化されるか？

一方で、選挙の「お作法」は選挙の信頼性を高める以外の理由によってそのあり方が決められることもある。

選挙をめぐる技術は急速に進展している。もともと顕著なのが電子投票の導入である。電子投票といってもその形態はさまざまであるが、これまで手作業で行っていた手続きの効率性を上げるとともに、集計段階での不正を防止することができると考えられている。

技術の進歩で効率性が高まり、それが結局のところ選挙の信頼性を高めることにもつながるということになると、技術が各国に伝播して、選挙の「お作法」はどこでも同じ形になるだろうか。つまり、選挙の「お作法」は国際的に標準化されることになるだろうか。こればかりはよくわからない。投票の仕方そのものの、選挙の運営の仕方そのものに価値をみいだし、それを守っていかうとする動きもあると思われるからだ。

たとえば、投票用紙を機械で読み込むことが効率的だという理解が進み、日本で投票の方式が記名式からマークシート方式に変更がされることになるだろうか。候補

者や政党の名前を書く行為自体に価値があるのだという議論は生まれないだろうか。こうなると選挙の信頼を確保する、ということにとどまらない価値が認識されることになる。どこまで選挙の「お作法」自体に人々が意味をみいだすのかは興味深い。

もしかしたら、民主化されて間もない国々では、投票後に再投票防止のためのインクを指につけることで民主主義を体感しているという人たちがいるかもしれない。

（かわなか たけし／アジア経済研究所 地域研究センター）